



The Community-based interventional programmes for family caregivers who look after persons with traumatic brain injury

Suzuki, Yusuke

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2012-03-25

(Date of Publication)

2012-10-11

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5427

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005427>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

専攻領域 リハビリテーション科学

専攻分野 運動機能障害学

氏名 鈴木雄介

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を()を付けて併記すること。)

The community-based interventional programmes for family caregivers who look after persons with traumatic brain injury (外傷性脳損傷患者の家族介護者への地域における介入プログラム)

論文内容の要旨

外傷性脳損傷患者の多くは神経行動学的変化を生じ、そのために家族介護者の多くが抑うつや不安などの心理学的苦痛を抱えている。本研究の目的は外傷性脳損傷患者の家族介護者の心理学的苦痛の軽減を図るための介入プログラムの効果を検証することである。参加者は近畿地方を中心とする外傷性脳損傷患者家族会(正会員約240名)から募集した。参加条件は、(1)患者が外傷性脳損傷の診断を受けていること、(2)外傷性脳損傷患者とのコミュニケーションに困難さを感じていること、(3)介入プログラムの全日程に参加できることとした。募集から3ヶ月間で16名の申し込みを受け、この16名は全ての参加条件を満たしていた。16名の参加者に週1回、1回4時間で全5回の介入プログラムを実施した。内容は外傷性脳損傷の基礎知識、高次脳機能障害への対応方法、アサーティブネストレーニングを応用したコミュニケーション技法訓練を中心に構成した。アサーティブネスとは米国で生まれた概念で、他人の権利を尊重しながら自分の権利を守ることを基本に、無理なく自分を表現するためのコミュニケーション能力をいう。アサーティブネストレーニングはアサーティブネスの権威者によって提言された標準的なガイドラインと原則に従った。アサーティブネスについての知識と情報は配布資料を用いて説明し、アサーティブな行動のロールプレイは筆者や他の参加者によるモデリングの援助とコーチングによって練習した。効果判定はGHQ-30, SDS, STAI, RASを評価尺度とし、介入前後およびフォローアップ(3ヶ月後と6ヶ月後)の時点で分析した。介入前後およびフォローアップの分散分析ではSDSは介入前とフォローアップ6ヵ月後に、STAI(状態不安)は介入前と介入後における平均値の比較で統計学的に有意な減少を認めた。これは介入プログラムが外傷性脳損傷患者の家族介護者の心理学的苦痛の軽減に効果をもつことの根拠を示すものである。介入プログラムを経験した家族介護者はロールプレイで自分と患者の普段のやり取りを再現することで自分のこれまでの患者へのコミュニケーションを客観的にモニタリングすることができた。このモニタリングは自分のこれまでの患者への要求や提案が一方的や感情的であったことへの気づきをもたらした。そして再ロールプレイでより良い要求や提案の方法を試すだけでなく、必要であれば自分で修正を加えられるという自己効力感を築けたことが家族介護者の心理学的苦痛が軽減した最大の理由と推察した。

指導教員氏名: 種村留美

論文審査の結果の要旨

| | | | |
|---|---|-----|-------|
| 氏名 | 鈴木 雄介 | | |
| 論文題目 | The community-based interventional programmes for family caregivers who look after persons with traumatic brain injury 外傷性脳損傷患者の家族介護者への地域における介入プログラム | | |
| 審査委員 | 区分 | 職名 | 氏名 |
| | 主査 | 教授 | 種村 留美 |
| | 副査 | 教授 | 安藤 啓司 |
| | 副査 | 准教授 | 野田 和恵 |
| 要 旨 | | | |
| <p>本研究の目的は、外傷性脳損傷患者の家族介護者に対し、当事者とのコミュニケーション手法による、心理学的苦痛の軽減を図るための包括的介入プログラムの効果を検証することである。外傷性脳損傷患者は神経行動学的問題を生じ、そのために家族介護者の多くが抑うつや不安などの心理学的苦痛を抱えている。対象とした参加者は、近畿地方を中心とした外傷性脳損傷患者家族会から募集し、16名が応募した。これら16名の参加者に対し、週1回4時間全5回の介入プログラムを実施した。介入内容は、外傷性脳損傷の基礎知識、高次脳機能障害への対応方法、アサーティブトレーニングを応用したコミュニケーション技法訓練を包括的に行った。効果判定には、GHQ-30(QOL)、SDS(うつ)、STAI(不安)、RAS(アサーティブ度)を評価尺度とし、介入前後、3ヶ月後、6ヶ月後で比較した。結果として、介入後に「うつ」や「不安」が有意に軽減していた。このことは、本包括的プログラムが介護者の心理的苦痛の軽減に効果を持つことが示された。また家族介護者は、本介入により、患者へのコミュニケーションを客観的にモニタリングすることが可能で、これまでの患者への要求や提案が一方的、もしくは感情的であったことへの気づきをもたらした。本研究は、心理的苦痛を抱える家族を対象とした希な介入研究であり、博士論文として価値のある集積であると認める。</p> <p>よって、学位申請者の鈴木雄介は、博士(保健学)の学位を得る資格があると認める。</p> | | | |
| <p>掲載論文名: The community-based interventional programmes for family caregivers who look after persons with traumatic brain injury 著者名: Yusuke SUZUKI, Rumi TANEMURA 受理日: 2011, 11, 26 掲載予定 Asian Journal of Occupational Therapy volume 8, 2012(web journal)</p> | | | |